うたそら

第2号

2021 May 5

参加者一覧 …… 02

連作欄 8首の連作 自由詠 …… 04

テーマ詠欄「緑」…… 26

一首評「そらよみ」 …… 34

短歌リレーコラム「望遠鏡」…… 36

リレーエッセイ「いちごいちえ」…… 38

次回予告・編集後記 …… 39

うたそら　第２号

発行：2021.05.02

編集・制作：千原こはぎ

@kohagi_tw　http://kohagiuta.com/utasora/

うたそら 第2号

ご参加いただいたみなさん（五十音順）

計122名

たくさんのご参加ありがとうございます！

相河東	@aikawa_azuma	
青藤木葉	@konoha__ao	
あき子	@ponko_san	
麻倉ゆえ	@AsakuraYue	
朝比奈諒	@asahina_tanka	
アダムス理恵	@adams_tanka	
あぼがど	@abggg_d	
天野うずめ	@uzume_no_hijiri	
雨虎俊寛	@amefurashi3107	
新棚のい	@hccmono	
有村桔梗	@chattenoire_k	
五十子尚夏		
石川順一	@Hitler57	
泉　葉子	@yoko00022	
isk	@ks_i_sk	
伊藤すみこ	@110sumikodayo	
宇祖田都子	@shinnsyutu2020	
泳二	@Ejshimada	
hs	@hswelt	
江口美由紀	@miyuki_eguchi	
榎本ユミ	@enomotoyumi1007	
衿足	@har_mare	
大坪命樹	@OotsuboMeiju	
小椋　杏	@ogura_anne	
小澤ほのか	@honokaozawa	
音平まど	@nandemonaihi16	
おもち	@mechanobiru	
貝澤駿一	@y_xy11	
梶原一人	@MrDekopin	
かなた小秋	@KanataKoaki	
涸れ井戸	@kareido1111	
河岸景都	@kate_kawagishi	
菊池洋勝	@kikutitc	
橘高なつめ	@@coconutkikko	
キナコモチコ	@kinakomooosan	
君村類	@kmmr_r09	
木村槿	@kimura_tanka	
久助	@nTblBm64shlt1ap	
京野パンダ	@kehunopanda	
去年	@kyonen1223	
黒須紗里菜	@TUKI12260407	
くろだたけし	@tkuro2016	
こうげつしずり	@umisorayoru	
小金森まき	@koganemorimaki	
古閑弓子	@yumikokg	
玄冬	@takeyabu69	
小泉夜雨	@kozumi_yau	
御殿山みなみ	@1ookat2	
ことのはゆめ。	@Puusen0623	
さとうはな	@s_hana111	
佐藤氷魚	@satohio_tanka	
佐藤博之	@Z_bozhi	
さびさわぐり	@Grisdevert20281	
沙羅粗伊	@LT8MBfDEzzeHLq2	
汐射ハルカ	@haru_c17h17cl2n	
塩本。2381	@tankanosio	
詩季	@4kitanka55	

次号予告 うたそら 第3号

連作欄 8首の連作 自由詠

テーマ詠欄 「遊」

一首評「そらよみ」

短歌リレーコラム「望遠鏡」

リレーエッセイ「いちごいちえ」

短歌募集

投稿先等、詳しくはうたそらのご案内ページをご覧ください

http://kohagiuta.com/utasora/

第3号 〆切 '21 6/30（水）24時

- 8首の連作 自由詠
- テーマ詠「遊」1首

第4号 〆切 '21 8/31（火）24時

- 8首の連作 自由詠
- テーマ詠「学」1首

編集後記

今年もどこにも行けないGWとなりそうですね。空模様も「どこにも行くな」と言っているような雨続き。雷と雨音の響く部屋でこちらを書いています。皆さま、GWはいかがお過ごしでしょうか。

このたびは短歌誌「うたそら」第２号へのご参加、ありがとうございます。ご寄稿くださった皆さまに心より感謝申し上げます。第２号の参加歌人さまは122名、連作欄には86名、テーマ詠には107名のご投稿をいただきました。

今回のテーマ詠のお題は新緑の季節ということで「緑」。植物や風、野菜など、爽やかな初夏の「緑」をお楽しみください。

また、短歌なリレーコラムでバトンを引き継いでくださったのは多賀盛剛さん、リレーエッセイは月丘ナイルさんが書いてくださっています。

そして今号から新しいコーナーも始まりました。前号の「うたそら」から気になった／好きな一首を選んで、200文字程度で思いを綴っていただく、一首評「そらよみ」。歌を投稿するだけではなく、読んで感想を伝える／もらうことで、得られる気づきや喜びもあるのではと思います。ぜひご参加ください。

「うたそら」では Twitterでの呟きもお待ちしております。「#うたそら」をつけて、お読みになった感想をお聞かせください。

次号は６月末〆切の７月初旬発行、テーマ詠のお題は「遊」です。夏の始まりですね。いったいどんな夏になるのでしょうか。皆さまのすてきな夏の作品をお待ちしております！

編集鳥　千原こはぎ

リレーエッセイ 2

いちごいちえ

前号の人の短歌から一語を摘んで
それをテーマにエッセイを書くページ
今号のテーマと書き手さんは…

テーマ　歌

書き手　月丘ナイル

母はいつも歌っている人だった。家事をしながら、書き物をしながら、幼いわたしや妹と手を繋いで歩きながら。時にラララと歌詞をごまかして、母はいつも歌っていた。童謡、アニメの主題歌、（今となれば）やや古いＪ－ＰＯＰ。思い返してみれば、オリジナルの曲もあった。お風呂でわたしや妹がタオルを湯船に沈めた時の「タオルクラゲの歌」。毎回歌詞が少しずつ違ったような気もするし、あれは作詞・作曲、我が母であろう。歯磨きの歌、着替えの歌、わたしも妹も寝つきのいい子供だったせいか子守唄だけは全く記憶にないが……（これでは鬼化が進んでしまった時に戻れないではないか@鬼滅の刃）

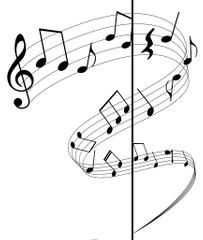
こどもが喜ぶから母が歌うのか、母が歌うからこどもが喜ぶようになったのか、今となってはわからない。ご機嫌な時には「オー・シャンゼリゼ」、夕暮れ時には「夕焼小焼」、雨がふれば「あめふりくまのこ」、天気予報士が今夜は冷え込み雨から雪になるでしょうと言えば「クリスマス・イブ」。ジャンルも世代もごちゃ混ぜだが、季節や天気、心の在り様に合わせて歌う母のもとで、かくしてわたしは立派なミュージカル好きに育った。

ミュージカルが大好きだと同級生に話したら、役者が芝居の途中で急に歌い出すことに馴染めない、だってわたしたち日常生活の中で急に歌い出したりしないじゃん、と言われたことがある。「え？歌い出さないの？？？」と言いはしなかったが、心の中で思った。実はまさにミュージカルのようなロマンチックなシチュエーションに気持ちが高まりすぎて、ヒロインよろしく歌って恋の告白をしたことすらある。それは流石にまだわたしがピュアだった（分別がなかったとも言う）若かりし頃だが。照れ笑いだか苦笑いだかを浮かべつつも馬鹿にはしなかったお相手には感謝しかない。直接伝える機会ももうないが、あの時は本当にありがとうございました。

最後にちょっと短歌の話をしよう。わたしはミュージカルも大好きだが短歌も大好きだ。特に私の俵万智さん好きは一部界隈（万智さんそしてわたしも所属している短歌結社「心の花」）ではちょっと有名なのだが、その俵万智さんの最新歌集『未来のサイズ』が第36回詩歌文学館賞の短歌部門と第55回迢空賞を受賞された。いやっほい！おめでとうございます！！前者は前年中に刊行された最も優れた作品集に贈られるそうで、そうでしょうそうでしょうと何故か誇らしげなわたしだが、この歌集の最後の一首が、こちら。

別れ来し男たちとの人生の「もし」どれもよし我が「ラ・ラ・ランド」　　俵万智

この一首を読んだ時、この人とこの人の歌にわたしが特別惹かれる理由がわかったような気さえしたものである。



月丘ナイル

スポットを浴びたあなたが左手をわたしに向けて差し出せば、恋

シダタクマ　@s_i_d_a
嶋田さくらこ　@sakrako0304
ジム　@ganbarimanjyuu
西鎮　@xi_zhen_ivUT
雀來豆　@jacksbeans2
章生　@yaneura_neko
湘南日光　@csSR34CfTXWmr
城山桜　@siro_saku14mv
セサミスペースＭ　@sesamespace_m
草流　@kusa2619
蒼音　@chari433
たえなかすず　@suzususuzu2009
多香子
たかはしりおこ　@nashkrkr
瀧口美和　@abcdefghijklmiw
竹林ミ來　@chik325
田中翠香　@suikakinenbi
茅野　@white22autumn
千原こはぎ　@kohagi_tw
chari　@greenchari2
月丘ナイル　@nyle_222
月硝子　@gesshodo

ともえ夕夏　@croissant_hey_z
長井めも　@longmemo_tanka
中村成志　@nakam8
夏本橙　@natsumototou
成瀬悠　@naruse000yuu
にう　@yuru11ne1217han
西淳子　@Jacky244Ray
西村曜　@nsmrakira
ネコノカナエ　@nekonokanae_uta
薄荷。　@aie0himeco
はとサブレ
雛河麦　@@may_spica_358
廣珍堂　@Hirochin_dos
福山桃歌　@peachsong_521
藤森岬　@xk5RX1A8F46kakn
細川エリカ　@luvluvkasen
歩歩　@h_o_o_o_n
まさけ　@mskpompomfuwa23
増子拓己　@mashiko_takumi
御糸さち　@MEATsachi
三浦なつ　@natsumiuraok
みおん　@mionknight

深影コトハ　@cotoha_mikage
衣未　@mimi_4567
水せ　@m_iya_o
虫武一俊　@mushitake
六浦筆の助　@Tohakumutun5057
六厩めれう　@mereumumai
村田一広　@mucci2018
八重森かもめ　@lazybirdcage_t
八重森さくら。　@yaesaku0329h2
優木ごまヲ　@yukigomao
ゆや ゆき　@yuya_yuki_tanka
ゆりこ　@b7282e_akaneiro
横雲　@yokogumo3
夜花　@yohana_no_sekai
龍翔　@oppizuntsuan
Red velvet cake　@R_velvet__Cake
朧　@rou_tanka
芦花　@roka_06
若枝あうう　@WakaedaArrau
渡邊知博
和田晴美　@hrm143ponta

連作欄 8首の連作 自由詩

#うたそう

丁寧な堕落

相河東

レシートを断り早足で帰る21℃を保つ6畳
チャンネルと書かれたボタンを押し続ける 涼しい部屋でアイスが溶ける
ジッポーにオイルを入れる丁寧に丁寧な暮らしから遠ざかる
紫の煙で満ちているはずの部屋を黄色に塗り替えていく
すまないと言う声色で友人が察した 今日もカラオケに行けず
2年以上連絡を取らないままのトークを消せずに非表示にする
自主的に休むことなど出来ぬまま最低字数で書くレポート
後に死ぬことだけが明確であるせいかつはもう生活じゃない

風を飼う

青藤木葉

公園でビニール袋と遊んでた春風ひとつ持って帰った
花の香を好むらしくて無機質な居間に一枝桜を挿した
翌日の朝に桜は散っていて君はまつげに絡まってくる
扇風機を付けると君は驚いて珈琲全部こぼして笑う
寝苦しい夜には吐息吹き付けて初めて誰かに夢を話した
海にいた頃の記憶があるらしい雨の窓辺を見つめる日暮れ
砂浜で一度キスして手を放すしょっぱい風にほどけて消える
それからは部屋に花の香広がって心を撫でる僕の春風

犬を捨てたい

朝比奈諒

透明な傘をばさっとひらくみたいな感情があった気がする、春
いろはすのラベルを剥がす　痛みとか悲しみとかは隠されている
七色のポストイットが芽のように歌集にさわぐ春の夕暮れ
凡庸な悪なのだろうひろわれる犬を見るため犬を捨てたい
大丈夫（夜になったら消えてゆく街のひかりのようなかなしみ）
春の夜にふあん、と口に出してみる　ふ、の吐息から雲が生まれた
植物の声、聞いたことある？　葉桜の道をゆくときあなたは迷路
影だけが寄り添うように重なって僕の温度を知らないでいる

明治政府ができたとき、明治天皇は宮内省内にじぶんに和歌を教える立場のにんげんをおいた、そのなかに香川景樹の弟子の八田知紀がいた、さらにその弟子の高崎正風もおなじく明治天皇に和歌をおしえた、

そこから発展して、明治21年、宮内省内に御歌所、おうたどころていう組織ができた、高崎正風がその所長になった、高崎正風はかなり遠慮なく明治天皇を指導してたらしい、それがきにいられたんやろか、

御歌所の歌人、ていうだけで当時は人気やった、太陽ていう、政治、文学、経済とかなんでもありの総合誌で、明治32年に歌人人気投票みたいなんがされた、高崎正風が1位になった、上位10人中8人が御歌所のひとやった、それ以外は佐佐木信綱と海上胤平がランクインした、

ぼくはこういうことをしらへんかった、

ここから近代短歌の歴史がはじまる、明治31年、正岡子規が歌よみに与ふる書ていう連載を新聞上ではじめた、古今和歌集とか、紀貫之とか、香川景樹とか、八田知紀とか、名指しやないけど高崎正風とかをへたくそやていうた、

これによって、それまでの和歌は権威をうしなって、近代短歌のまくがあけた、

ていうことになってる、

正岡子規は根岸短歌会ていう結社やってた、そんで、そこにいはった伊藤左千夫とかが中心になってアララギができた、アララギからは未来とか塔とかがわかれてっていまにいたる、

近代短歌よりもまえのことをぼくはしらへんかった、いまてもとに筑摩書房の現代短歌全集の第一巻がある、内容は明治四十二年以前で、ここに御歌所の歌人はおらへん、

明治32年、歌よみに与ふる書の翌年でも、高崎正風はいちばん人気の歌人やった、明治にいきてたらぼくは高崎正風をしってたやろう、でもいまのぼくはしらへんかった、本に高崎正風がのってへん、

ある立ち位置から過去をみると、歌よみに与ふる書が近代短歌のはじまりにみえる、どうやらぼくは、そういう立ち位置にいる、そこからながめても近代短歌よりもまえがよくみえへんかった、

正岡子規とおんなじ時期に短歌の革新をがんばってたひとに佐佐木信綱がいた、歌よみに与ふる書とおなじ明治31年、信綱は心の花を創刊した、そこにはおなじく革新をがんばってた与謝野鉄幹、その先生の落合直文、あと正岡子規の文章ものってた、でもそこに高崎正風の文章ものってた、信綱は中立的にその時代をみてた、あたらしい短歌をもとめながら、それまでの和歌も否定せえへんかった、

もしそこの延長にある立ち位置から過去をながめたら、ぼくは江戸と明治が連続する歴史をみていたかもしれへん、

たぶん短歌にも勝者がいて、その勝者がかいた歴史がある、

正岡子規も与謝野鉄幹も佐佐木信綱も、近代短歌の歴史の直前に新体詩ていうんをやってたんやけど、それも言及されることはすくない、

大正の後半くらいから、口語で言文一致でやろうとしてたひとたちがいた、明治の革新から、さらに革新をもとめた、口語自由律短歌なんかもやってた、おおきなながれとしてはだいたい第二次世界大戦がはじまるくらいまでそういうなんがあった、

このあたりもいまは言及されることはすくない、たぶんざんねんながらそれらも短歌の歴史においては勝者ではなかった、

現在のことだけかんがえると、インターネット上の情報は、とてもアクセスしやすい、でも特定のサービスのうえにあるデータが、いつまでものこる保証がない、たとえばYahoo!ジオシティーズの終了とともにうしなわれた２０００年代、２０１０年代の短歌の情報は、どれくらいあったやろうか、

紙の情報はそれよりも安定してのこるやろう、

50年後、１００年後、どんな短歌の歴史がかたられるやろうか、だれが短歌の歴史をつくるやろうか、

川の記憶

あぼがど

前世では銀河を駆ける彗星であったのだろうあたたかき石
水切りの石は鋭いのを選ぶ川はどこまでいっても柔い
父という子どもを殺しかけたのを覚えていないというように凪ぐ
たぶん虫を炙って食べていたような気がする記憶の中のおじさん
足首がゆらりぼやける対岸に行けないままで終わりゆく夏
星よりも尊くひかる灯籠が座礁してゆく　蒸し暑い夜
本当のわたしの姿を映し出す水面に石を投じて笑う
大地にも釘を刺されている水も時間も元には戻れないこと

不確かさの定義

天野うずめ

不確かに引いたマーカーこれからも何の希望を持てないでいる
ＵＦＯの時速を考えながらでも春は確かに私を過ぎる
青春の定義は何か　区別する必要のない雨が降ります
つまらない発言だったと自覚する燻製マヨネーズは白いまま
生活の一部に出てこぬフレーズを思い浮かべて抜く風呂の栓
飛行機が少しの間見えている口を半分開けて見ている
概念としての言葉を閉じ込める難しいのはもうたくさんだ
手段とかかっこいいこと言ってみるもうすぐツツジの季節に変わる

スイタレイディ

雨虎俊寛

太陽の塔の背中にある顔を見ることもなくきみは過ぎゆく
きみのこと指フレームで五分咲きのなんじゃもんじゃの木ごととらえる
ソラードの展望塔にふたりきりここからどこへ行けばいいのか
新しい観覧車でもここからは幾重に映るかすかな波紋
春空の余白のようなつまさきをきみはぽーんとほうりだしてる
わた雲をきみはしずかに見あげてる　ペットボトルのキャップをしめる
哀しさ悔しさ寂しさ愛しさのどれを選ぼう　雲がかぶさる
日時計に自分の影を映してる　閉園時間まで一時間

五月に

有村桔梗

春の野をひと雨ごとに塗りかへてあざやかになるみどりさみどり
さよならとさやうならとを並べたら変はつてしまふさみしさがある
ヒヤシンスもしくはスミレ　この春を弔ふための花を選べば
ちやくちやくと整へられて水田は四月の空を湛へてをりぬ
あをあをと空をうつしてまどかなる猫のまなこのまどかな世界
生きてゆく　わたくしたちはまひるまの葉桜といふ時間をくぐり
すずらんがあちらこちらに揺れてゐて五月の風の入り口になる
またひとつ扉を開けてこの家に五月生まれのわたくしと猫

短歌リレーコラム 望遠鏡 ②

短歌にまつわるあれこれについて
自由きままに書くページ
今号のテーマと書き手さんは…

書き手　多賀盛剛

テーマ　短歌の歴史について

歴史は勝者によって書かれる、ウィンストンチャーチルはそうかいた、せやからそれは最初にチャーチルがいうた、みたいにいわれる、でもそのまえにジョージオーウェルがかいてたとか、ヘルマンゲーリングもおんなじこというてた、ともいわれる、１８９１年にアメリカの政治家のジョージグラハムベストがいうてたていう記録が残ってる、にたようないいまわしはそのまえから各国にあった、ともいわれてる、ただ、たぶん、チャーチルがいちばん有名で、このいいまわしの勝者になった、

短歌についてなんかかこておもたとき、ぼくもよみたいもんをかこておもた、ぼくがまだしらへんことをよみたいから、ぼくがまだしらへんことをかこておもた、

１６００年、いろいろあって、たった５００人の兵といっしょに細川幽斎は田辺城をまもってた、そこに敵が１５０００人でせめてきた、まあ、幽斎は死を覚悟したらしいけど、そんとき後陽成天皇の使いがやってきて、戦いをやめさせた、日本には古今伝授ていう和歌の秘伝があった、細川幽斎は当時それを伝授されてた唯一のひとやった、幽斎がしんだらそれがついえるから、後陽成天皇は幽斎がしなへんようになんとかした、

古今伝授は、日本最初の勅撰である古今和歌集の真の読み解き方、みたいなんで、その伝授は柿本人麻呂の肖像をかざった部屋でおこなわれた、柿本人麻呂は和歌のかみさま、比喩的なかみさまでなく、ほんまにかみさまやとおもわれてた、

部屋には三種の神器を模したものがおかれた、三種の神器は、鏡が正直、勾玉が慈悲、剣が征伐を象徴してる、それが古今和歌集にかくされてるみっつの木とみっつの鳥に対応してる、みたいなことが伝授された、

それがとうじの絶対的な権威やった、

18世紀から19世紀にかけて和歌の革新があった、

朝廷にいたひとは、御所のなかのとくべつなところにはいれるかはいれへんかで、ふたつにわけられてた、それは堂上と地下、とうしょうもしくはどうじょうと、じげていわれた、これが14世紀ごろから庶民とかも地下ていうようになった、つまり地下は、堂上以外、ていう意味になった、

細川幽斎は堂上の八条宮智仁親王、中院通勝、烏丸光広に古今伝授をした、これ以降、古今伝授は堂上だけでおこなわれた、幽斎には地下の弟子もいたけど、そのひとたちに古今伝授はされへんかった、身分の差が和歌に対する立ち位置をわけた、地下は権威をてにいれられへん、その地下から和歌革新の動きがでてきた、

八条宮智仁親王から何人かをへて、冷泉為村に古今伝授がつたわった、その冷泉為村の弟子に小沢蘆庵ていう地下のひとがいた、

ただごと歌、ていうんはいまでは奥村晃作さんやけど、もともとは古今和歌集の序文に紀貫之がかいたことに由来する、それを小沢蘆庵がじぶんの和歌の中心にたてて歌論を展開した、

ただ今思へることを、我が言はるる詞をもて、ことわりの聞ゆるやうに言ひ出づる、つまりおおざっぱにいうとおもたことをそのまま和歌にする、て蘆庵がいうそれは、おなじ古今和歌集に由来してはいるけど、三種の神器と隠されたみっつの木を対応させる、暗号をよみとくような古今伝授の思想とはまるでちがう、だから冷泉為村に破門された、

その蘆庵の弟子に香川景樹ていうひとがいて、このひとが蘆庵の思想をうけついで、それをひろめて、江戸時代の後半に桂園派ていわれる流派をきづいた、

天使失墜

五十子尚夏

「スクショタイムください」といううつくしき欠陥（バグ）　花疲れなき四月過ぐ
燕（つばくめ）発つその日よりわたくしの内部をめぐる北回帰線
姿見の奥へゆくときあまつさえ風が失うわずかな速度
《Un ange passe（天使が通る）》その沈黙をどちらからともなく崩しつつ、声は風
〈きゅんです〉の〈きゅん〉の響きにこの星のすべての音叉振るう皐月よ
恋人が愛の軽さを言うようにチューリップは空輸されてゆく　夜
向日葵がロシア国花であることをあなたにはまだ告げないでおく
天文学的確率でババ抜きが終わらぬ天使失墜の夜

食べる事と整理する事

石川順一

空腹が昂進すればクリームパンふりかけ御飯で凌いで居るよ
歌謡曲本をラジオに立てかける聞こえて来ない故郷の歌
シジミ汁俳句に出来ぬもどかしさ父のボヤキは休み取る事
盛り上がる皮膚の様だと土に降る雨は猫かも片付け再開
プリンターテーブルの下から二階へと電話台どかさねば部屋に入れぬ
片付けは進むが玄関の傘入れが煉瓦の様に鎮座して居る
姉のコート二着が鏡の前にある獅子唐辛子も吊られて居たり
卓上の伊右衛門を飲む事頻りケーキの台の尖つて居たり

朔を抱く

泉　葉子

切ったはず暖房の風うしろから首を撫でたの未来の恋人
ぼくはまだザリガニだから「明日」の意味とかわかってないよ
遠吠えに返事がなくて拗ねた耳もうオオカミに戻れないんだ
やきもちを妬くほど人に成ってないくせに好きだよ（すごく変だよ）
光を渦潮に投げたこれでもう未練はないか聞こえないのか
いくらでも泣いていい日を作りなよ今すぐにでも抱きしめるから
その時が来たら話そうまだ秘密　銀貨5枚で肩たたき券
見えない新しい月を信じたの消えないものの影をなぞって

こひ、したふ

isk

「おカネ、ない」　愛売るきみの欲を買う　そんな僕にもiがない
生きていく歩幅のちがう君とぼく　愛したつもり、できてたつもり
「水琴窟？」たずねる君のささくれに　「違う」と言えず別離をえらぶ
本を繰る君の指先がいとしくてまつげの先の光になりたい
朝まだき　海馬は耳から駈けてゆき　響いているのは春の聲
のき先で湯桶に足をあそばせて　語って聞かす在りし日よ
「ここにいて！」　戸惑う子らの足元のテープを剥ぎし　過ぎた優しさ
旅立ちのかばんの中にしのばせる　旅前に書きし父母への文と

シナシナ派ですと答える路地裏のポテトに夢を与えるために

三浦くもり

ポテトフライは時間がたつと油分が染みわたってしなしなになってしまう。好んで選ぶ人は少ないだろう。けれど、あえてそのシナシナ派だと伝える。路地裏に捨てられた「ポテトに夢を与えるため」ならば、実際は本音を偽っているのかもしれない。それでも路地裏のポテトに寄り添おうとする言葉は、見捨てられたもの、忘れられたもの、弱いものへの普遍的で温かい眼差しが感じられる、芯からのやさしさがある。

一首評　古閑弓子

心地いい孤独に浸る星空を見上げたいのは故郷だから

三浦くもり

主体は普段は星空を見上げることもないのではないか。しかしながら故郷を頭から浴びるかのように、星空に浸る。この空は自分だけのもの。だからこそ孤独すら心地よい。故郷だから、というのは決して強がりには聞こえない。むしろ故郷への愛が強く伝わってくる一首だ。この連作がReBornと名付けられていることから、自分の生まれた土地からの再出発という意味も含んでいるのだろう。力強い歌だ。

一首評　蒼音

爪痕を残したいのに透き通る蒼しかないし掴む雲だって

甘宮雨

掴みたいと願う空の色を『青』でも『碧』でもなく、『透き通る蒼』と表現した。それが歌全体に静かな悲しみと諦めの翳りを投げかけているようで、とても印象的に感じた。

一首評　藤森岬

廃駅の名をうつすため青年はカメラを少し空へ向けたり

貝澤駿一

感情や意見を表明しない。共感と同意を求めない。というように、古びた短歌的欲望から自由であることが二十一世紀の歌詠みにとって必要な態度である。と言ったのは誰だったか。…ともかく。貝澤さんの一首は、さりげないスナップショットのような見せかけの裏に、感情表現を削ぎ取ってもこんなに豊かな歌が詠めるんだという確かな企みが隠されているようで、思わず笑みがこぼれそうになるのでありました

一首評　雀來豆

そらいろのクレヨンあおいクレヨンは夏のあいだに短くなるね

まきぞの

一読し、当たり前のことかもしれないけれど、そうなんだよね、と納得し、誰かがどこかの縁側で夢中になって夏の景色を描いている情景が浮かび、伸びやかな気持ちになりました。素直な言い回し、リズムの軽やかさは覚えやすく、記憶に残って噛みしめられる歌になり得ると思います。抜けるような青空を見るたびふっと出てくる歌です。

一首評　詩季

「ドラえもんブルー」と名付けられた色それはまっさらに晴れた空色

山上秋恵

「ドラえもんブルー」という表現の発見がまず秀逸。希望と未来に溢れ、なおかつ親しみやすく身近な〔青〕を想起させる。それは同時に、現在の自分たちが手に入れ難い色でもある。下句が上句の説明風になってしまったのは、個人的に残念。この青のイメージをさらに膨らませたり、あるいは別の地点を目指してジャンプしたりと、より大きな流れへ導いて欲しかった。だが、上から下まで一気に読み下す潔さを良しとする人も居るだろう。この辺は好みか。

一首評　中村成志

まだ水曜日

伊藤すみこ

力水吐かずに飲んで挑む朝　小兵は今日も怒られに行く
暑気払い　ご馳走になる鰻重は燃料になり碇にもなり
みぞおちが重く澱んだ午後三時コーヒーさえもうまく飲めない
「落ち着いていきや。」と背中叩くのは酸いも甘いも知ったりんご酢
「また何かあったら話聞くからね。」付箋に添えるブラックサンダー
消えたいと思いながらも指先はクラフトビールと打ち込んでいる
やめますと言葉にしてもやめられずバターピーナツだからよかった
のり弁のおかかのような役割が果たせたのなら良しとしましょう

屋上猟部　II

宇祖田都子

五限目にロマノフ朝が崩壊し部長がこない屋上猟部
噴き上がる桜吹雪がバクの背を薄紅色に染めるから駄目
踊り場に鏡の破片散乱し全てに犀のお尻が遠い
屋上で部長と二人捕虫網掲げて猟の捕獲に励む
この時期は桜の蕊を中庭の池に浸したものを与えよ
教科書は持ち込み禁止屋上の猟部部室は絶対王政
いつまでも顔と名前が一致せぬ猟部顧問は古文の講師
来歴は不明トリセツ見当たらぬバクリンガルという電子機器

初夏

泳二

やさしさと帽子は春に置き去りでどうか誰にも会いませんよう
はつなつをコーナンで買う説明書どおりに組み立てられたはつなつ
駅前のポストの横に咲いている紫陽花の花言葉は「またね」
はつなつは初めての夏こんにちはジュースのようなぼくのはつなつ
かき氷屋さんでアルバイトしよう引越ししよう梅雨が明けたら
はつなつが駅のホームに落ちていて雨に濡れない場所でよかった
真夜中にまた雨が降る右耳が遠いところの人を失う
はつなつを飲み干す前にはつなつの写真を撮って君に送ろう

草を食みながら

江口美由紀

誰かから誰かへわたる一隻の船を見ている半島の朝
海沿いのカーブはゆるくいまなにか大事なことを思い出したが
ぺちぺちと尻を叩いて助手席へ促す草食みやまぬわたしを
ガマゴリうどんを五箱干物を三種類提げて受けとるおまけの若布
空が高すぎて落ちそう　ごろごろとプロパンガスがやってくる午後
どこからかネアンデルタールねあんでるたーるいつかの森の木霊のような
締め切りの話をしているはずなのにあなたはひつじ雲をかぞえて
深い深いこの藍色の夢からの引き揚げ方を猫に教わる

一首評 そらよみ

前号の「うたそら」から気になった一首をとりあげて200文字くらいで語る一首評のコーナーです

白鳥になる　あなたの街の気温からわたしの街の気温を引けば

有村桔梗

冬に白鳥が渡ってきて、春になると去っていく土地に、私も住んでいる。そんな土地に住む者にとって白鳥は、冬そのものだ、とも思える。しかしこの歌では、一方の街と他方の街の気温の差が「白鳥になる」と言う。白鳥の存在と不在の境界は、ふたりの間に横たわる距離だ。距離感を、季節の移ろいで伝える歌は少なくないのかもしれないが、この歌は距離を暗示する具体が配置されたことでより瑞々しく、隔絶を詠っているように思う。

一首評　西鎮

光源をなぞってつくる街路図のどこにもいないわたしの温度

川原まりも

ランドサットのような宇宙からの光学観測によって、人の経済活動が可視化できるようになった。しかしそこには人の心の動きまでが反映されているわけではない。結果的に行動には至らなかった情念であればなおさらである。科学は日々人間の生態を暴いて公式に当てはめていくけれども、今までも、そしてこれからも拾い上げられることのないであろう「わたし」を見つけられるものなら見つけてご覧と言っているようである。

一首評　六厩めれう

十年をきみと過ごして春に死ぬそういう生まれ変わりをしたい

嶋田さくらこ

一読して、こういう気持ちわかる、と思った。「十年」が絶妙に良くて、十年一緒にいたら、お互いのいろんな面が見えるけどそれを受け入れて、それでもまだ一緒にいたいと思う頃なのではないかと思う。（無理と思ったらとっくに別れてる）お互いがまだまだ一緒にいたいと思う頃に死に別れて、その思いを持ったまま生まれ変わって、また出会う。春は、そんな生まれ変わりにふさわしい。

一首評　江口美由紀

ゴルゴへとばいきんまんは依頼する「指定口座に振り込みました」

田中翠香

自分の作品を確認したあとお隣に目をやると「ジャムおじさん暗殺指令」という不穏なタイトルが並んでおり、ヤバい、読むしかない、となった冒頭の一首である。ゴルゴへの依頼は明らかにやりすぎだ。一体どれだけ悪役のツテをたどって行き着いたのか、そして誰に振込方法を教わったのか。本気である。だがその言葉に感情はない。冷徹か諦めか。様々なマシーンを自作しながら戦っていたあの頃を思い出すとやるせない。幸せな時代は終わったのだ。

一首評　竹林ミ來

とこしえ、とだれかが口にするたびに向かいのジョンが吠えるシステム

西村曜

「とこしえ」と口にしたくなる一首。とこしえとは「いつまでも続くこと、ながく変わらないこと」という意味。なぜ、ジョンは吠えるのだろう。ググったら、犬は不安なときや要求があるとき、興奮しているときなどに吠えるとのこと。いつまでも続くことに対して不安になったり、興奮したりするのは分かる気がする。また、そういうことを要求したいときもある。これは蛇足であるが、佐久間一行さんに「システム～♪」と歌ってほしい。

一首評　西淳子

持て余す

榎本ユミ

やせっぽちなのに瞳は穏やかな猫が乳首を見せて寝そべる
授乳する猿の写真が飾られた乳腺外科の待合しずか
母性とは持て余すもの自転車のペダルが軽いまま春は来る
ここだけはずっと春だと騙しては次々ひらかせていく切り花
枯れるのが正しい末路と思わない　茶色いコインを花器にしずめて
昨晩のわたしがさぼって今晩のわたしが詰め替えているシャンプー
さびしさと幼さは似てぬるま湯の中で乳房はゆらりと歪む
ソーダ水のチェリーみたいだ溶けていく入浴剤の気泡をまとい

病みに光を

大坪命樹

歳と病みに疲れ果てたる我にこそ将に添はんと春曇りの陽
幻聴の飽和せるづこ洗はんと静かなる曲流す夕どき
されこうべ思考伝播の穴づくめ裂かるる脳を載せてふらふら
空の声あまた聞こゆるしずめにし妙なる文の描ける澄澄
浮世にて疲れで生くる能わずと吐息あるさき檜の仏
とき経れば虚しき岩の我がこころ苔むすごとく歌詠ふなり
やまいだれ形は庇の下なるぞ妻の初診も無事終わりにき
疲れ果つる君を元気付けんとて青天井の芝生の上に

二世帯住宅

小澤ほのか

ピンポーンしゅんです！とドアホン越しに引っ越してきたご挨拶する
二階からとたたたたんと音がするああ甥たちが起き始めたな
聞いていた共働きの忙しさ想像よりもはるかに超える
いろいろと生活音がするけれどちっとも嫌な音ではなくて
きっとこの足音はかおるくんだよそう言う母はもう祖母の顔
少しだけ不機嫌そうな父なのに甥たちが来れば満面の笑み
体調を崩して実家にいるけれど治ってもまだここに居たいと
生きる意味を見出せないでいるのだが今なら生きていける気がする

ハマータウンに光を捧げ

貝澤駿一

落書きに閉じ込められた少年のTシャツの赤褪せていく夏
そしてきみが自由を叫び罫線をちゃんとはみ出す直線AB
弔いの炎のように揺らめいたウィンカー　長き夜のはじまり
みんなここで生き抜く光のとどかないハマータウンに光を捧げ
両翼が翼になれば滑空し誰かの影として生きていく
反骨の少年ABCが語る言葉すべてが街の抒情詩
若き母と幼き双子が手をつなぎりっしんべんとして歩き出す
ほら足元を見てごらんって歌うとき歌手は目の前だけ見てるんだ

老いてなほ夢見ることの罪なれや迷へる道に若葉茂れる　◆横雲

葉桜が囁く花の遺言に君は静かに微笑みかけた　◆夜花

その頬をひつぱたきたい　パレットに緑の絵の具だけ並べたい　◆龍翔

緑の花つける桜が好きと言い、唇尖らすこの子が恋人。　◆Red velvet cake

色弱のきみの瞳の懐かしく今でも着ない服のあること　◆朧

方言がふいに出るとき君の目は遥か遠くの緑を映す　◆芦花

信号の緑を青と呼ぶように俺はサラリーマンと呼ばれる　◆若枝あうう

陽光を透過↓投下しトンネルの（わたし、緑　どこまでも緑　◆渡邊知博

新しい生活

梶原一人

焼きたてのパンの薫りが風に乗り幸せですかと問いかけてくる
玄関にマット敷くこと当たり前だと思ってた君と棲むまで
築五十五年　父より年上の鉄筋造りの白いマンション
コンセントあまりに少なき部屋にして前の住人いかに暮らせり
湯を沸かし味噌汁つくり飯を盛り　あちらこちらで湯気のわくわく
吾が洗い君がきれいに皿を拭くその一連に絆深まる
資源ごみ捨てるべき日を間違えてまた家に来るAmazonの箱
必要なことばかりまだ話してるもっと無意味な会話がしたい

この春も

涸れ井戸

図書館の裏手の桜この春も一人で観てる散歩しながら
十分も歩けば心満たされて写真も撮って観桜おわり
靴底のすり切れて穴少し開き雨降る前に買いに行かねば
三色のボールペンほぼ日手帳鞄に入れてあると落ち着く
桜木と菜の花の墓地自衛隊駐屯地抜け神社に至る
戦没者慰霊碑鳥居マスクした家族連れ宮の森公園
近道をして帰途に就くバラックと団地の間の坂道のぼり
村境に丸いポストが立っていてまた来年も来いよと笑う

パレードの続き

河岸景都

新しく買ったおもちゃを振り回しコンクリートと喜び合うとき
立ち上がり進んだ先の聖母像わたしを探すふりをしていた
決めごとが多すぎる日はとりあえず近所の森で童話を叫ぶ
ほの赤く灯るランプの愉快さに気が付きもせず駆け抜けていく
指先に触れる命に見えたのは青色だけの花束だった
鳴り響く太鼓の音を聞きながら正しい自分で暮らす準備
掴まった紐は何だか頼りなく三つ編みにして強くしてみる
パレードの続きに見える寂しさの端っこむしり地面に隠す

それうすべてを抱いて眠らう

菊池洋勝

壁際の緑の管の酸素繋ぐそれらすべてを抱いて眠らう
グリーンサラダなんて贅沢なものそれらすべてを抱いて眠らう
サーモグラフィーはグリーンから赤へそれらすべてを抱いて眠らう
緑のカーテンが伸びる頃の光それらすべてを抱いて眠らう
緑の血流れる日影者となるそれらすべてを抱いて眠らう
緑の羽根の針が届く心臓それらすべてを抱いて眠らう
麦秋や緑のミロのパッケージそれらすべてを抱いて眠らう
緑膿菌の数値が高い肺炎それらすべてを抱いて眠らう

テーマ詠「緑」

手の甲の傷から漏れる血の色は翠(あお)じゃなかった　口でふさいだ
ふかみどり　にらみあうより笑いあう君と私でありたかったよ
だんだんと緑濃くなるやんばるの森のにおいを胸深く吸う
ＤＭの「関わらないで」失恋の春に溶けゆくクリームソーダ
グリーングリーン哀しい日ほど長調の曲になるのよそういうものよ
助手席のわたしすべてを鮮やかな緑に染めるきみのクーパー
きらきらの空は緑に輝いてピンクのうさぎ抱いてほころぶ
疾走がたったひとつの意思表示　誘導灯の緑人間
あこがれは小さき我が家のベランダにはためく緑のペアのＴシャツ
陽の光梳きて地上に落としやる竹林ゆかばわれもかがよふ
高熱より覚めし明け方エメラルドグリーンの点滴光を溜めて
新緑のにおいを知っているような顔して仔犬が空を吸い込む
芽吹きだす緑を胸に吸い込んで一斉に咲く五月の桜
風光るモスクの壁に描かれた葉っぱの緑はビリジャンでない

◆ 増子拓己
◆ 御糸さち
◆ 三浦なつ
◆ みおん
◆ 深影コトハ
◆ 衣未
◆ 水せ
◆ 虫武一俊
◆ 六浦筆の助
◆ 六厩めれう
◆ 村田一広
◆ 八重森さくう。
◆ ゆや　ゆき
◆ ゆりこ

ショートカットで行く

橘高なつめ

乗ってからしばらく経って名乗られる少し変だと思ったが無視
手袋が白い指差し確認の片手ハンドル危なくないか
何をどう端折るのかしら運転手ショートカットで行きますと言う
懐かしい匂いの夜気がうっすらと開けられている窓のすき間に
メーターは三千円と予想していたが見るたびすばやく超えた
夜空には逃げ場所はない見上げてる車窓に月のひっかいたキズ
運賃を支払う際にぶるぶるとなぜか震えていた彼の手は
そういえば、タクシードライバーだった昔つき合っていたひとの夢

叛乱前夜

君村類

そんなものなのだと思うそのものがそんなものだと思うそのもの
稜線を生んだ背骨を軋ませて従順としての直立不動
分度器のカーブをなぞる　まだなぞる　武器にならずに死んでいく指
こんな街、と言い捨てられてふるわれた傘のしずくの先にある街
晩餐の餐に持たせる飲み食いの意味に適したファーストフード
ケンタッキーをいちいちひらいて食べているひとが食べない軟骨の白
叛乱前夜(なんのために?)(なんのために?)(なんのために?)なんのために?
「なんでも話してみてください」と言う音声入力　好きだったんだ

チワワのコハク

久助

登録者五・七万人いてユーチューバーのチワワのコハク
寝たふりをしたりソファに隠れたり散歩ぎらいのチワワのコハク
散歩して帰ってくると座布団に毛を擦り付けるは何の儀式ぞ
人間のことばで言ってごらんパパさんコハクと会話したがり
ボーダーのだぼっとパンツにしましまの靴下履いたママさん愛らし
垂直の護岸ブロックのぼらんとぴょんぴょん跳ねる無謀なコハク
これもまた野生のあかしふわふわの冷感ベッドを懸命に掘る
掃除機のコード巻き取るすばやさでコハク炬燵に吸い込まれゆく

外

去年

外道って道があるなら思い切り外側歩く春の真ん中
学校の外付けハードディスクみたいな予備校に行く3GB(ギガ)くらい
棒状のグラフの中にいることで外からぼくがわかる先生
外苑へつながる道を歩むとき「外苑だ」とは思っていない
内外と投げ分けたあと真ん中に投げるみたいな選曲をする
銃声が鳴ってもいいと思いつつ眼鏡の外の夜を見ている
円状のグラフの外にいるぼくが母数に帰る熱いほっぺた
なんでぼくが東大に?との広告は写真の外にペンだこがある

緑をあをと呼ぶとき俺を座らせたオオオニバスが沈むのだろう　◆中村成志
燃えるほど想っていてもいい人で終わってしまう緑レンジャー　◆夏本橙
怒ってる群青色と緑色を宥めてエメラルドグリーン　◆成瀬悠
「トトロだ」と小さな足を止めきみはまあるい緑を指差し笑う　◆にう
何年も前の戦隊ヒーローのグリーンのお面がこちらを見ている　◆西淳子
さいきんの僕のこころのその辺をただ緑陰と呼んでもいいか　◆西村曜
アオミドロしずかに殖えてもうみんな森になったらいいんだみんな　◆ネコノカナエ
草色に染まったデニムのひざこぞうあの子が初夏を連れてくるらしい　◆薄荷。
いっせいにe(みどり)芽吹かせ歌うGReeeeeeN!　ヒトには聞こえぬ波を起こして　◆雛河麦
さ緑の桜並木となる朝に散歩のひとのシューズ新し　◆廣珍堂
あたらしいみどりあざやかとりどりのマスクの下の誇らしき顔　◆福山桃歌
真夜中に覚めた指先そろそろとあばいてくのね早緑の莢　◆藤森岬
若き葉は恐れを知らぬ鋒で虚ろ切り裂き高みへ登る　◆細川エリカ
昨日までなかったはずのフレーバー　麦茶みたいな色した緑茶　◆歩歩

障害者雇用の走り書きメモ①

黒須紗里菜

定期券と私服は普通の会社員が制服をきて障害者となる
たんぽぽのポロシャツを着て元気よく綿毛のような挨拶をとばす
カートおし空調並みのスピードで配達物を運ぶ館内
一瞬だけ時間がとまりありがとうと言われるそれが私の仕事
給料の額より多い国からの年間費用に負い目を覚える
ささくれた薬指にはる絆創膏が似合う独身で終わるわたしは
7割の確率で子に遺伝する精神障害じゃ結婚できない
歌を詠む祖母に習いし趣味があり腐らずわたしは生活できる

日常

くろだたけし

一日の節目で鳴らすアラームと時々思ういつか死ぬこと
四本の脚のひとつが浮いていて力がはいる時にかたむく
脳天を（それでいいとは思わない）押さえつけるとお湯が出てくる
限られた時間を生きている僕が同じところで何度も笑う
あきらめる悲しい曲が流れたら悲しい顔になることにする
この先は昔見ていたシーエムを見るようにして笑われるのだ
（でも生まれ変わったら別人でしょう当たりはずれも大きいでしょう）
やわらかい蜜柑に爪をたてながら天気予報ははずれてもいい

わたしの彼は本の虫

小金森まき

待ち合わせいつも早めに来てるのに本屋に寄って遅れるあなた
最近は遠慮もしなくなったよね隙間時間に入り込む本
私よりたくさん触れているでしょうプレゼントしたブックカバーに
雨降りで今日は仕事でまた本に恋人の座を譲る　夜まで
二人掛けソファであなたが本を読む横で観ている映画は字幕
メッセージカードは栞にされるから無記名のまま愛を並べる
死ぬときにともにいたいという本をいつも鞄に入れている彼
借りてみた本をめりっと開かせて海に飛ばしてカモメになあれ

雨音

古閑弓子

骨片のごとき花びら散つてゐて雨はときどき悼みに変はる
われよりも大事にされるコピー機か数人がかりで用紙を取りぬ
人よりも無口なことをもてあます日々のしじまに雨音は満つ
窓に降る雨は涙のやうだつた（B階段まで我慢しなさい）
さうやつて雲から見放されてきた雨をふたたび傘ではじいて
軒下に畳んでゆけり銀いろの骨をしづかに冷やした傘を
身体をうつシャワーの音はやさしくて水はこんなにあたたかくなる
ペットボトルの水はひかりに満たされて触れてみたいと何度だつて思ふ

テーマ詠「緑」

緑濃き苑に臥しゐしジョウビタキ冷えゆくのみのからだ埋めつ　◆蒼音
せめて君　カレーはいまも大盛りであれの窓は新緑であれ　◆たえなかすず
緑濃き山のふもとに暮らす友茶色の猫に「みどり」と名付ける　◆多香子
腕時計。緑の庭の片隅で名前の読めなくなった犬小屋。　◆たかはしりおこ
さみどりの大気が僕を後ろから抱きしめる　ほら、あれが夏だよ　◆瀧口美和
悠々と小径をすすめ木々はみな青信号の葉を揺らすから　◆竹林ミ來
緑青の膚の鹿に護られた博物館へひとり歩めり　◆田中翠香
絵の中の葉が色づいていくほどに心に湧いた緑の泉　◆茅野
いちめんの緑の海に音もなく夕陽は落ちてここも宇宙だ　◆千原こはぎ
同じ樹で育ったともと奪い合う陽の当たる場所生きるということ　◆chari
熱湯のなかで緑のひかり増しいんげんは今恋をしました　◆月丘ナイル
名も知れぬ草の緑の圧政に埋め尽くされるはつなつの庭　◆月硝子
たんぽぽの次々に咲くやうにして雨の降りだすスクールゾーン　◆ともえ夕夏
散るという言葉は過敏あたらしく緑を灯すソメイヨシノは　◆長井めも

花束を抱く

小泉夜雨

手放せばなんてことない風船のみえなくなってからが余生よ
ひとしきり雨にとかしてさっきまで泣いていたのの半分は嘘
運命じゃなかったのかな粛々とねぎま外せばてんでばらばら
嫌なやつだと思われた夜中でもずっと歩いていられたらいい
好きな歌ばかり歌って笑われて電話は切ってそれでおしまい
天下一ほんとにわるい泥棒になったあなたととてとてたった
日差しから春、一号館わきに春、ザワークラウト作ったら春
なら抱いてくれるんですか香水を変えたわたしを花束として

和田さん

御殿山みなみ

わたしから最も近い加賀さんが変わった　和田さんはずーっと同じ
帰り際にちゃんと四冊買ったからわれわれが鳴かせない閑古鳥
市境をおおきな川が流れててそれぞれ映画館を持ってたね
二冊ずつ貸していたけど最終巻つけたちょっぴり厚い最終巻
伊賀行きのNinja Bus　いま、人だった　わたしの心が、人だったのよ
親友よ廃墟写真にあるものはそれでもあったものだと思う
モンハンを十年ぶりにやっている　十年前の少年ジャンプ
和田さんと行ったコンビニ残っててそこで買ったイヤホンは壊れた

水彩

さとうはな

そら豆のシチューは煮えて夕暮れが夕刻になるまでの一瞬
花時雨　窓辺で本を読むゆびの冷えてたこととベリーの紅茶
きみでない誰かと笑いあった道椿の蜜を次々に吸い
記憶にはいつも夕暮れ海の名を持つ古書店の住所なぞれば
画面には春の嵐の予報円近づいていて午後だけの国
長い名の甘い珈琲もてあまし不意にはじまるなぞなぞあそび
春の王としてきみが立つ水際に飛び交う蜻蛉、忘れたくない
水彩の青空の下さよならを、今さよならを甘く告げるよ

三文小説

佐藤氷魚

身体から二滴こぼれた淡墨（うすずみ）の影の重なる夜道を歩む
強風のなかの枝葉の擦れる音　永遠という錯覚を見た
夜中でも太陽を連れているような愛の言葉を繰り返すきみ
昼間でも宵闇を連れているような色の瞳で見つめるあなた
凪いでいる胸板に浮く舟からは北極星を見つけられずに
言い訳は薄紙のごと破かれて終わり間近の三文小説
月光に慰められたわたくしの影ひとつきりくっきりと在る
夜だけを浄らかにして満月は雲の向こうを愛しに行った

翡翠（かはせみ）が春にさざめく川岸のみどりをあをく切り裂きて飛ぶ　◆佐藤博之
逃げろ逃げろ青信号に照らされて足の動かぬ私はダフネ　◆さびさわぐり
萌える緑（あお）あざやかに山肌のちっぽけにだめおり　◆沙羅粗伊
駅そばの出汁のかおりと千住葱みどり電車は轟音通過　◆汐射ハルカ
ごくごくと天の水を飲む街路樹のみどりつややか梅雨入りを待つ　◆塩本。2381
届けにも春はにじんで新しい苗字は草のかんむりかぶる　◆詩季
信号も芝も青かるこの国でみどりの黒と髪は染められ　◆シダタクマ
視野欠けて くすむ視界の 瞳には ちっとも緑 ありませんから　◆ジム
うぐいす、のす、を放つとき舌さきはつとさみどりへひたる心地す　◆西鎮
きみはどこで振りかえるのかただ青く光って見えるだけのY字路　◆雀來豆
試験管ベイビーみたいだ白妙の百合根のカルスに緑の羽根を　◆章生
薄緑匂い立つ春すじ取りを終えたばかりの君のゆびから　◆城山桜
飲みほした緑茶の愛を歌にする寒色系のメロディーにのせ　◆セサミスペースM
緑児は唇ぐっと噛み締めて我に負けじと手を握りくる　◆草流

「景」

沙羅粗伊

風止まる名残りの幹や舞わずして枯れ桜抱く春静かなり
陸橋を駆け上る靴　リュック　やけに悲しい夕焼け空だ
さくらはな通い路忘れ遠並木みちくさ半刻少女のかばん
淡山に犬の遠吠え緩む肝　峰の煙のたなびく方へ
速報が水さす諍い春夕べ　飯炊くゆげの逃げる天窓
口髭に食べらるる飯竹の子や腹癒せに剃り落としたは夢の中
白い空延齢草の花うつりひっそり朝の居住まい仕舞い
潮汲むおとど融の月戀しかる院の陸奥景幽影の舞

スターティングブロック

汐射ハルカ

頑なに築き上げたる冬要害春どもら来て秒で崩壊
街路樹は一直線にみち示す蕾などなくまだ冬木立
蕾などかえり見もせず急ぐ人　知れずさくらはその時を待つ
北辺の漁村に咲いたやまざくらもう列島が忘れた頃に
「不確か」がまた遮ってくる目をやれば新井薬師のはなは盛りか
世の中を斜に見ていた稚拙（いとけな）くはな散る音にも耳を塞いだ
マフラーは外して行こう水縹の風呂敷包み斜に担いで
うぐいすのふろしき孕めはるかぜにもう次のこと背中押してる

やわらか

詩季

晴天の予感はいつも不意打ちで早く開けてとレースカーテンは
柔らかく周り笑かすビタミンを配る君の背いつも真っ直ぐ
触れた手を握れば言葉にできなくてさまよう熱が丸みを帯びる
一晩の漂白に耐えふくよかな緑を見せる二人の急須
甥っ子を初めて抱く日ネイル消し短い爪の彼女がはしゃぐ
波になり小さき苗は春をゆく途切れはしない風をしのばせ
これ以上触れてはだめと光彩は優しく諭す五月のシャボン
「大好き」がそれ以上にふくらめばどんな言葉へ変わってゆくの

空言

シダタクマ

有（う）に在りて思ふは空（くう）のことばかり空（そら）を思ふもまた有（あ）るゆゑか
恨みにも倦みしこころも有（う）にあらば浮き世もやがて空（うつ）ろならまし
うき舟のうき世の波に揺られなば思ひしづくにうみをぞ見ゆる
しづく身の浜にうたれてうつろぶね浦見の窓もなきからならむ
空（うつ）ろなり然（さ）も実（まこと）もなき空（から）の身の吐くは烟（けぶり）と空（そら）ごとばかり
一代のまこともうそも吐き尽くしいまからの身はけぶりにあらむ
紙巻きの火をながめをりよにふりていまだ空（そら）にも地にもかへらじ
くろきとふ粘油（タール）の肺に重くありこの身のうきをよに留めをりぬ

テーマ詠「緑」

まだ青い森の空気をそのままに宿す日記は本棚の奥　◆橘高なつめ
新緑が深緑にへと変わる頃僕らは出会う何度も出会う　◆キナコモチコ
新緑は許しも得ずに殖えていく　わたしは昨日、茶碗を割った　◆君村類
万緑の宇宙と思う公園のシロツメクサで編む天使の輪　◆木村槿
院ゼミの噂話が目の前を素通りしてゆく新緑の候　◆久助
車窓から色が濃くなる新緑に子どもを思う老親の顔　◆京野パンダ
ブランコが揺れない町の公園の花が咲かないくすむ新緑　◆黒須紗里菜
葉桜が好きなんですと胸を張り　答えるように生きていこうよ　◆こうげつしずり
蝶たちが緑の森に板書する　バレエシューズで授業を受ける　◆小金森まき
渇いてるメトロポリスにさみどりを僕にメロンの微熱弾けて　◆玄冬
空き家だと思った（だって蔦がある）家から昼のラジオ　かすかに　◆小泉夜雨
アイスカフェ氷は溶けて待ち人に代わり窓枠にはアオガエル　◆ことのは　もも。
さみどりの実は葉桜を撓ませていつか、というのが次の約束　◆さとうはな
持ち主が小さくなって帰る日も眼鏡に映る緑のひかり　◆佐藤氷魚

春ですね

嶋田さくらこ

ポテサラを買うポテサラを作るそのどちらもわたしには必要だ
予報より少し遅れて雨が降るようにあなたの返信はくる
春ですね　水仙の葉を韮として食べるみたいな事故です恋は
白い鳥を産む木の下でとりあえず髪の長さを褒めてもらった
眼差しのつよさに答えられなくて　ボタンダウンのシャツ似合ってる
でもそれは、愛と呼べずにする行為、色即是空色即是空
わたしたちなぜかお笑い芸人の名前を友だちみたいに呼んで
除雪車のきいろ倉庫にしまわれて幾春夢に雨音を聞く

廃線

西鎮

五百ミリの桃の天然水ちょっと飲んで裸のあなたへ返す
白き背をつとなぞるとき指先へひとつひとつが背骨たしかに
てのひらにつつまれている自我があり喪いながら融けてゆくもの
丁寧に髪を乾かす音を聴きなんだか広い春の世界が
散文詩を集めたようなやりとりと花びら踏んで別れるんだね
駅からの道にいつかの脱け殻の空きテナントの向こうも暮れる
水上機のように川面をあとにして交わっていくかげろうの羽
廃線のレールに添って揺れている蓮花の群れをいつか護った

目覚めると

雀來豆

目覚めると恐竜はまだそこにいたぼくに手渡すそのぬばたまよ
ダイヤモンドクロスほどけて長きものとなり阪急電車は冷えつつ走る
二進法に取り憑かれたか昨日から歩くリズムがどうもおかしい
白旗のつもりで上げたTシャツがとてもきれいな空色だった
市民祭のロードレースを走るたび新種の蝶を見つけてしまう
街中の傘が集まり夜明けまで踊り続ける雨に唄えば
おなじ色を塗っているのに本棚の塗り替え作業はすこしさびしい
自転車に乗った新聞配達の少年のように（はい、チーズ）笑って

饒舌な夜明け

章生

言葉にて背骨を励起して天へ昇りゆく夜の打ち上げ花火
あふれでた言葉金庫に閉じ込めてあくまで芯を冷たく冷やす
出せなかった声はいつしか雲になり遠くで稲妻光らせている
饒舌な夜明けの舌を引き抜いて静けさ闇が黒々光る
濡れている夜の草原あなたから生まれてきたとさんざめく星
傾いたｉｆという文字　岸壁に打ちつけている波であること
眠りいるあなたの瞼その夢を喰らってときに鳴くアイシャドウ
はなびらに声押し殺し狂うときせなかをなぞり昇る月影

ざわめいたまま終礼は始まらずいつしか森に変わる教室　◆泳二
木漏れ日を膝掛けにして昼寝する緑のにおいが夢をつらぬく　◆ｈｓ
凡人でしあわせですよ信号の色はみどりと歌に詠むのも　◆榎本ユミ
こいびとを呼べばすべてがさんざめく緑の道をいつしか歩む　◆衿足
石の包丁を握った指先がすっかり草の色に染まって　◆小椋　杏
甥たちの未来はまだまだ真っ白でそれでも少し緑に染まり　◆小澤ほのか
朝つゆの草のレンズは万華鏡あまたの宇宙光はじけて　◆音平まど
血管の色を緑と答えれば私に「春」の診断がつく　◆おもち
のぼり棒にしがみつく子のまぶしさに緑濃くしていくグラウンド　◆貝澤駿一
新緑の木々見ゆるところ公園とおもい向かえば病院の庭　◆梶原一人
偽物の緑は嫌いあの人がそう言うまでの大好きな色　◆かなた小秋
湖西線走る緑の快速は赤青黄らを敦賀に運ぶ　◆涸れ井戸
はつなつの頃にあなたが持ってきた緑色を使わない塗り絵　◆河岸景都
宇都宮迄の切符とグリーンガムあれば通院も遠足になる　◆菊池洋勝

Come on Baby　ぼくになるきみへ

湘南日光

人生のプロローグたる胎内に住むわたくしへ Come on Baby
全力でうさぎは駆ける雪原をどこまで行くの春のお迎え
芽キャベツは春の赤ちゃんことことと鍋はゆりかごシチューにします
おそろいのサクラクレパスおそおいの黄色いぼうし春におはよう
思い出はガーゼハンカチうさぎぐみ園児のぼくはいつも泣き虫
幼稚園の通園バスの熊、兎、多分喋るよ多分ヒト語で
日曜はカレーパンマン定休日アンパンマンっと缶けりをする
老いてゆき子供に帰る大人たちぬりえおりがみディはあたたか

いい風吹くこの辺り

セサミスペース M

スコーンを二個温めてコーヒーを二杯淹れるとき住みたい街
なんにもない雲の近くの屋根裏でラジカセで聴く好きな音楽
上を見て言うなれば今この部屋はドラムの中で音に打たれる
「只今外出中」の鍵屋の貼り紙は存在感があるなあ
セーターがきれいに裂ける気がしたらきょうはいい風吹くこの辺り
指先にあぶないやつが腰かけるガムを吐き捨て歌いはじめた
枯れ葉舞う分厚い美術館の外　挨拶のない挨拶をする
眠れない夜も気づけば朝となるふとんにくるまれロダンの像

香水

草流

姉さんの香水内緒でつけてみた私も大人になったでしょうか
姉さんが初めて香水つけた日はそれがデートと気づかなかった
プレゼント何が欲しいと訊いてくる初恋の人香水欲しい
土産だよそっと出された香水は知っていたんだ新婚旅行の
抽斗に未だに捨てず仕舞ってるNo.5の空瓶一つ
さようなら貴方がくれた香水をいつまでたっても捨てられないの
新しい彼が出来たの貴方とは違う香水くれました
街の中振り向いていた知らぬ人君とおんなじ匂いがしてた

月影

蒼音

ひもすがら廊下に消えぬみづたまりやがて月影ふはりふはりと
過ぎたれば美談と変はる恋なるや小さき息で雛菊は咲く
地平線はじめて見せし北海道　景色はいつも横から動く
恋文を書かむとおもふ稚内そのわだつみの奥に島影
文を書くときこそ狂へ筆先は我のおもひを超えて走りぬ
ラベンダーのかをりが鼻へ届きにし一時ありて花は揺れたり
かへり来る君のやさしきひらがなに我のことばの稚さ知りき
夜の浜にひとりでをれば潮風は我を乾かす　出づる月影

テーマ詠「緑」

美しい首を幾度落としても艶めく緑は知らんふりする　◆相河東
初夏色のなにか身につけ一生に一度くらいは似合ってみたい　◆あき子
うららかな川沿いゆけば草むらと冷たい風がじゃれあっている　◆麻倉ゆえ
青色と混ぜられてゆく黄色には光のありて緑となりぬ　◆アダムス理恵
美しいグラデーションを期待して床にピーマン転がす　拾う　◆天野うずめ
緑青（ろくしょう）の城から白い曳き波を生んで水上バス遠ざかる　◆雨虎俊寛
滑り台のてっぺんにて新緑の青さを嗅いだきみが愛しい　◆新棚のい
まなぶたをひとり開けばみづみづとみどりあふるる五月にをりぬ　◆有村桔梗
レノンが死なずポールがいないさみどりの夢に冷たきグランドピアノ　◆五十子尚夏
緑色の魔人が寝覚めに現れるハリネズミ君には眠つて貰ふ　◆石川順一
木漏れ日を掬うファインダー降り出した雨に透けてるあなた眩しい　◆泉　葉子
あてどなく木陰の下に佇めば　日向きらめく子らの笑み　◆isk
好きな色「緑」と言った君だからもう少しだけ信じてみたい　◆伊藤すみこ
ハローワーク解雇予告の日の午後に欠員補充1の求人　◆宇祖田都子

りりしずむ

たえなかすず

頑として居続けること春深く夜深くまだ咲き乱れている
ピーチシャーベット掬わず刺したひといろにさも迷惑そうな顔してあなた
不幸なんてどうでもいいけどジーンズの膝の破れ加減がすてき
移り気な半生ひとつそよがせて脳裏は過去のこいびとがすむ
海開き　波が泡立つ陽のなかで繰り返すことは安らかなこと
「わたくしとお会いできて…うん。光栄です」鏡のわたしが転生ののち
殺されずいたなら逢おう十年後　笑うあなたの愚かさが好き
わたしにだけ嘘つく男ばかりいておそらく四十代ゆえの嘘

猫の世界

多香子

子猫たち狩を知らない都会でも組んずほぐれつ遊びて学ぶ
お客様お忘れ物はと声かけるネコバスの車掌もやはり猫
ざらざらと可愛い舌がなめている唐揚げつまんだ私の指を
猫ならば大きさ問わない十キロのメインクーンも女神のように
こうなれば「かわいらしさ」で対決だアジアの虎と家の猫とは
メス猫がしっぽパタパタするたびに欠伸しているぬるいオス猫
家の猫の好きな絨毯花柄のみどり部分が爪とぎ専用
猫柄のパジャマで過ごす日曜日　鍋に煮あがるうすべに林檎

母なる海

瀧口美和

どの道も歩いていけば海に出るのが故郷(ふるさと)のいいとこだった
砂浜に流木でかく将来の夢は将来夢があること
もし巨人だったらテトラポッド積みゲームのルール考えるのに
はしゃぐ声海猫に似て海猫の声はほんとに猫に似ている
さざ波の内緒話を盗み聞く今年も暑い夏になりそう
この辺は潮が満ちたら沈むんだちゃんと自分の限界を知る
地平線ＡＢ上の島Ｐが思い出となる時間(とき)を求めよ
分母＝海、分子＝青空　正解です　夕日のマルとマンテンの星

ドリーム・カムズ・ドリームズ

竹林ミ來

ネットワークがつながりません管理者が不正な夢を見ていませんか
炙られるときに和風の夢を見せられて醤油はますます和風
糖質を減らしたパンを食べた日の夢では飛べる可能性大
吸入の薬を使う夢を見て白い風船たち舞い上がる
ホームランボールは落ちてくるまでのあいだ静かな夢を見ている
ＣＤが眠ったときに弾く曲は回ったときと全くちがう
早退の夢を見ている昼休み　帰ればいいんじゃないかからだも
保護ガラスフィルムは割れるまでずっとスマートフォンになる夢のなか

失割れスプーンは風を切り裂けない

若枝あうう

ありがちな失恋だからありがちなコード進行でも泣いていい
ナイフとして生まれたかったかもしれないスプーンだけで混ぜるパエリア
ギャルソンの白きエプロンちょうどよく汚れて　大人ってずるいよな
怖いくらいぜんぶ欲しいよ新しい街をひとりで歩いてるとき
道はすぐ譲るほうです往来の真ん中に咲く花はないから
水鏡　ひとのかたちになったって空を映していたかったのに
コンビニのパスタに先割れスプーンのそんな生き方ですかあなたも
最初から火種は俺のほうだった最後まであなたは風だった

ファインダー

渡邉知博

雨止みに生きた五月に会いたくて見えないことをわたしにみせて
レンズからあなたの水晶体(レンズ)を覗くとき五月うさぎは深く潜って
我我に房を垂らして藤の花　自由落下の　眼　滝壺
ふいにでた陽に照らされて歪みゆくもう会えないと思ってたもの
見えなかった水たまりさえ見えてきて一寸(ちょっと)あしで踏み抜いてやろう
龍の眼がこの世に開く入口に今はちいさく花を開いて
糸杉が暗く燃え立ちゆうらりと生きて帰って麻シャツの爺
そうろりと近づいていく眼の速度　かつていた猫　とらえたのは無

春いちご食む

和田晴美

自転車で葱を押さえて走ってる葱は時々飛んでいくので
停留所前の歩道で仁王立ちしてバスを待つ人をよけてく
春先の気候さながら荒れたまま指を汚して春いちご食む
あの頃がそういえば春だったんだ夏立つ日ひとは再びこもる
骨折の治療したよね螺子二本そこだけ暖色系あたたかく
ぼうぜんと朝食をとる　雨でした　話の中では皆が滲んで
自販機で買うパンそれはコモのパン全種制覇までは至らず
会う時は必ず一緒に飲み食いをしていた全てが思い出のよう

パンを買ってかえろう

田中翠香

朝が来た小道の猫に会うためにクロワッサンを買ってかえろう
同じころパン屋は店のシャッターを開けて土曜の朝を迎える
行列は角までずっとできていてそこまで香るデニッシュの匂い
軽やかにフランスパンを抱きかかえ家まで歩く家まで歩く！
それとなくサンドイッチを手に取れば今朝のチーズは厚切りである
カレーパン高くかかげて中学の男子生徒は乾杯をする
ただひとつ売れ残ってるあんパンを取る人だよね知っていますよ
赤ちゃんの頬によく似たクリームパン買う父親が押すベビーカー

あの頃の君

茅野

席替えで突然君が現れた　それから世界は青空だった
下手なりに丁寧な字が好きだから君のイタズラ書きが消せない
告白はできないくせにあわよくば気づいてほしいなんて思った
あっち向いてホイ！またしようって言ったのにあれから一度もできていないね
藤棚に忘れられてるスパイクは色で君のじゃないってわかる
理科室で床の窪みにつまずいてはにかんだ顔を覚えているよ
その薄い唇が呼ぶもの全部やわらかそうな音をしていた
かずくんはあの頃の君を呼ぶための言葉になってもう使えない

はつなつの終わり

千原こはぎ

いつのまにか春が終わっていたような自覚の無さで離れるふたり
ハナミズキがすきだと去年も言ったけどいいよ覚えてなくたっていい
お揃いの時計はきみのだけすぐに壊れてなんの予兆だろうか
「かなしい」も「さみしい」も置いてきたせいで今のわたしを説明できない
でもそんなもんだよ（諦めのよさを長所と思っていて可笑しいね）
薄まってしまったきみとの毎日を混ぜても混ぜても透けてくる底
誰のためでもなくわたしのために買うくすんだ空の色のスカート
来年の春はどんなふたりなんだろ　ソーダフロート崩せずにいる

フェンスの上を歩く

chari

数限りない色をもつ桜木をただ一本の鉛筆で描く
ああ嘘に上下などなく清らかなコーラ溢れる壜を咥える
また不意に目覚めるだろう後悔という名の猫が爪を研ぎつつ
傷口が塞がらぬよう午前二時ナイフで抉る思い出がある
燃えるゴミと燃えないゴミの入れ口のどちらに飛べば救われますか
喪った人の貌を日々なぞる鉛筆の線の掠れゆくこと
磨いたら輝く銀の匙があり穢れを溜める布切れがある
「割れるからシャボン玉は飛べるの」とフェンスの上を歩く少女は

ぬいしろ

ゆりこ

新学期に慣れぬ娘は俯いてクルミの如き玉結びする
予期不安感じる春は前もって母たる我の心をかがる
穏やかな心に戻すため眠る並縫いみたいな子の息づかい
制服のボタンを娘は引きちぎる予備のボタンを我は付け直す
ダメダメの日々が続いて落ち込んで千鳥がけさえ責め立ててくる
ほどいては縫い直す日々キルトには徐々に浮き出る卒業の文字
予備校の課題の自画像ポツポツとまつり縫いのごとキャンバスに描く
ぬいしろに隠す玉留め母として我の悩みは絶えることない

コロナと一大感染イベント五輪

横雲

自粛とて閉じ籠められて策尽きてなおかつ進む五輪無理強い
コロナ禍に感染対策空振りでもはや誰にも会えない日々だ
観客も選手もいずに開かれる五輪を誰が希望というのか
無理やりの一大感染イベントで五輪の意義は足蹴にされて
身勝手な利権を追って混迷の坩堝にはまるトラジコメディー
この春も花は咲たが世の中は苦しいままで未来は見えない
難しいことに気付いて立ち竦む普通の人生普通の生活
戦争がやめられないでいた国は五輪もやはり竹槍作戦？

ロビンソンが歌へない

龍翔

新しい季節だなんて思へずによれた背広に降る春の雨
思ひ出のレコードジャケット立てかけてなかつたことにする壁の傷
国民がたつたふたりの国ならばきみがもつぱら財務大臣
あをぞらは開けつぱなしの窓だからわたしは風にさらされてゐる
捨て猫の前にしやがんでやめないとやめられないの違ひを説けり
交差点できみを探してしまふから山崎まさよしかよと叱つて
裏声が地声に切り替はるときに宇宙の風が吹き抜けてゆく
ファルセットみたいなきみを失つてもう歌へずにゐるロビンソン

くだもの

朧

セックスは生殖行為と思ひつつ仏壇の飯まるくよそひぬ
生ぬるき経血つつと流れ落ち卵子についた子の字を殺す
妻といふ肩書きのあるリビングに枯れかけてゐる黄金かづら
糠床に飼ひ慣らされてゐた指を魔性へ変へて春の日の夢
まひるまの密航をするわたくしにあなたは櫂となつてこたへる
靴音も赤い吐息も天鵞絨に吸はれて此処はメゾンあひびき
ひ、合法、ひ、合法つて溺れゆく足の小指をきつく吸はれて
引き金はあなたにやらうこの恋は鉄砲ひとつ咥へる恋だ

涙がキラリ（後編）

月丘ナイル

アルコール消毒に負けた手の甲に妙に優しいニベアが嫌い
瑠璃色の羽を持たないルリビタキ雌の誰よりやさしい瞳
黒髪の先をつまんで説明す自己注射針の細さについて
手のひらで潰したまっくろくろすけが夜ごとわたしの夢に出て来る
女医だって涙がキラリ羽繕いするやさしさで撫でられたなら
ひらがなの書き方教えるようにして手ほどくインスリン自己注射
甘露飴ゆっくり溶けて夕暮れは誰かのことを責めたりしない
葉桜の緑の色の冴えわたり止まることなき神様の筆

コーヒー・カンタータ

月硝子

許されに行く純喫茶薄闇とバッハ溶け合うその胎内へ
コーヒー愛歌う乙女のカンタータミルクをそそぐような転調
人間と話さなかった一日の心の色を映す珈琲
束の間の酒の酔いより甘やかな色香溢れるサウジ・シャンパン
しろがねの匙はプリンの柔肌の震えにそっと深く分け入る
生真面目にレシピ守れば咲き揃うタルトレットの気まぐれな花
告げぬまま消えゆく恋の残り火のようなフランボワーズの茜
真夜中のビター・トリュフは媚びもせず愛されもせぬ言の葉の種子

春を歩け

ともえ夕夏

ひとけなき農道くらい楽しんでゆく営業は歩いてなんぼ
太陽が本気を出してSPF50はわたくしを守れるか
朽ちそうな家の庭先ていねいに干された洗濯物　活きている
吠える犬の声ただ単に「誰、誰、誰、誰、誰、誰?」と問うているのだ
ごくたまにこれ食いなって干し芋をくれるおばちゃん入院したらし
悪食な自販機だなあしわくちゃの千円札も噎せずに呑んで
父と同じ匂いの煙草ふかしつつ田起こしをするおじさんの背(せな)
歩く歩く歩くれんげの絨毯のような休耕田のあわいを

水溶性

長井めも

手のひらを空にかざして傘の無いひとほど空を見上げているね
ひらがなに聞こえる単語、藁半紙。ずいぶん前に失くしたと知る
とろけると能動的に書かされていじめられてるみたいと笑う
内包をしていた別れがはみ出して60分に一度重なる
傘立てのすかすかを見て安堵するもうきみに貸す雨は降らない
緑色した空中に揺れている少しも言いたくなかった言葉
校庭に深々と礼　もう一度だけ上げてみるゆっくりと顔
花びらへ挟まれてゆくきみの目に水溶性の感情がある

それが様式に収斂されるまで

六厭めれう

沖をゆくコンテナ船はゆうらりと同床異夢を推力として
忖度という航路みなたどるらし大海原にそれはあるらし
水棲の名残とおもうかなしみは静かに生れる満ち引きのごと
色の濃き眼窩に人を棲まわせて遠きヴォルガに船を曳く者
人追いてさまよう先の霧笛(きりぶえ)に五臓すべてを不意に打たれる
血縁を多くなくせば血縁をより多くなくせる人ぞ来る
残響は静かにほどけ身の裡に揺れる水位の下がる心地よ
夕木立弔うことは様になり　あゝ前世紀に人と生まれて

あまねく

八重森かもめ

一昨日の牛乳瓶の奥底に朝のひかりがまだ残ってる
偶然に歩幅が同じ人とゆく駅まで13分の道のり
急行が過ぎるのを待つ人たちのカメラロールに咲いてる桜
理科室のスチールウールちりちりとゆっくり倒れていくお父さん
食卓の魚肉ソーセージを照らす誰のものでもない夕まぐれ
ぶちまけて流したカップラーメンのネギがシンクに貼り付いている
買ってから一度もかけなかったまま壁掛け時計が死んでしまった
一色で塗ったぬり絵のような海またふるさとにイオンができた

うちはどうぶつえん

優木ごまヲ

指先でトンボが卵を産むように確かめている湯面の熱
脱け殻として掛け布団潰す時吸った孤独は肺に入れない
野良猫はひたすら深く穴を掘るらしいねきっとこんな気持ちで
玄関にカバが一頭好きなものハンカチスマホちょっと偏食
衣替えしたんだ渡り鳥たちが肩寄せあって止まり木に咲く
ジャングルは閉鎖してあるはずなのに本の蟻塚増えてゆく何故
生きているという名前のリビングでクジラの背中を撫でてあげよう
火加減の難しそうな恋をしていつ見ましたか最初の蛍

手荒れ

ゆや ゆき

真夜中に寝ぼけ眼で掻き毟り呆然と見る血塗れの手
爛れた手 指に浮き出るアカタテハひらり舞い咲き風に泳がす
また一つ広がる傷に息を吹き水を無くした荒野を眺む
触れるのは岩肌の指切なくて逃げる私を包む君の手
いつの間に綺麗になって微笑んで万年筆のインクを変える
治りかけ直ぐに油断し元通りワセリン塗りて愚かなる吾
「頑張ってお仕事してる手だもんね」医者に言われて滲みる傷口
治らない手荒れを覆うステロイド手袋はめて女優を気取る

パラダイソ・コンシェルジュ

深影コトハ

天国へようこそ我ら天使ェルジュが希望の来世にご案内します
愛されたまま腕の中で死にました生まれ変わりは希望しません
あの人の余生の庭を整える鳥になります生まれ変わって
這い這いを覚える前に死んだ子が乗せられてゆく白いコンベア
何度目の天国ですかゆっくりと七つ数えて眠りましょうね
（漂白が不十分だね）（あと一回転生したら最後だろうね）
間違えたふりで開ける門 神さまの言うとおりには飽きちゃったから
へその緒に幸運を（これはちょっとしたノベルティです）ここは天国

星屑の夜

水せ

この空を泳ぎにゆけばなにがある星屑ひとつちぎって食べた
夜明けから星が降るから刺すように痛みが走る今日が始まる
生まれてよ生まれてきてよって嘆く誰の心か星は流れる
落ちていく星空のなか夜の夢朝には消える君との輪舞曲
まだ夜は終わらないまま心臓が止まるかもしれなかった僕は
聖夜には奇跡くださいひとめだけ会いたいひとがいる指先に
よい夢を定型文のように言う逃げ出した先まどろみの夜
見上げてた空はいつの間にか暗くひとすじ星が流れて落ちた

生煮え

虫武一俊

癖髪をいらいらと手で梳きながら眺めるだけの祖国の亡び
生と死は一連であり王朝が積み建ててきた塔の鈍色
失ってしまった空虚とは別の空虚のあって混雑に倦む
三十五年先のことなど青空が溶け落ちてくるよりわかるかよ
優しさの一語で括ってしまわれたこの行動の根源は怒り
おれもあなたもなんらか加害し続けて今年もあおばしんめ見ている
革命と呼べば失敗するだろうこれは言葉で立ち向かうだけ
破壊から始まっているニュータウン人はどうしても人を思うか

真珠の母貝

六浦筆の助

イニシャルが方位磁針の君、僕にずっと向けてよ恋のN極
君からの僕へのメール通りゃんせ送りよいよい返しがこわい
恋迷う僕への言葉はおみくじも君のメールも「焦らず」が付き
物の怪のごと失恋の妄執を君はメールでするりと解いて
日勤で恥かく僕に君くれし「頑張りました!!」君は年下
婚活の相手が君なら行けるかも年の差婚の踏切板へ
愚痴ひがみ吐いて凹みし僕を君は真珠の母貝（ぼがい）のように包んで
この縁よ深く濃くなれ君ん家の自家製三年梅酒のように

なればいいのに

中村成志

もう何度この一行を読むために栞の紐の先の毛羽立ち
ペリーヌの仮の名前はオーレリー花を踏まずに向こうへ行こう
ようやくにもいだ眠りの端々を啄むごとく囀りすずめ
足跡はどう足掻いたって残るものペペロンチーニに輪切りの辛子
てのひらをかえしめぐらせもどすときスノードームに舞うのは鳥か
おにぎりのたらこの粒が膨らんで雨はこれから膝行ってくるの
みんなってだれとだれですふまんならみんなわたしになればいいのに
雨しきり　河口は水の塊を産む場所生まれ砕け去る場所

猫八景

成瀬悠

われら名も無き愚連隊目標はただ生きること猫にとっては
街中で「おーい」と手を振って蔑んだ目付きの尾が九つの猫
気になって公衆電話でお話しできましたから猫たち眠れ
ラベリングだけは止めとけ良いか猫を困らすなよお前が終わる
急ぐんだまごうことなき速やかに猫の尻尾も借りてきてよね
後光さすキャットタワーから出づる脚骨付き鶏モモ肉に見える
ハチワレとわたしのあいだ世界線思い思われもふりもふられ
猫を嗅げ幸せがあり猫を嗅げ安らぎがあり私は平和

エロスくんとタナトスちゃん

西淳子

帰宅部のOBとして車窓から後輩たちの練習をみる
カラオケを少し広めの棺桶とおもう。一人で歌っていると
たんぽぽの花一輪の髪飾りみたいな返信だけどよかった
鷲、兎、蛙、象らを生け贄に媚薬をつくる小林製薬
ゆっくりな拍手だなぁって思ってたわたしを殺したかっただね
遺書に「くぅ～疲れましたw」と書いてあり「お疲れさま」は別れのことば
エイプリルフール万歳！閻魔さま、人タンが食べ放題ですよ！
ちょうどいいエロが知りたい。筆名がセクシー女優と被る確率

打撲痕

西村曜

生きていることはかなしい愛や美の文字は代入しないでほしい
逝かないで。この世にはまだ明太子柄の傘などあるというのに
どこもかも名前だらけで（苦しくて）せめてあなたを無音で呼ぶが
死んだって歯型でわかる。いやむしろ、歯型じゃないとわからない、死、に、
うん、海のところは虚構だったけどあなたのとこは事実のつもり
ひかりって書けばひかりにできたのにそれでも打撲痕と記した
ケトルからほそく立つ湯気ほんとうのことをさっくり嘘にまぶせば
カーテンは風のかたちに膨らんで否カーテンの限界に膨らんで

セロファンテープの憂鬱

ネコノカナエ

名にしおはば歌ってごらんよセロテープセロとテープに名前を借りて
ほんとうはセロハンテープ裏表激しそうだねおせろはんって
羽虫をこころならずも捕まえて粘着面は裏か表か
セロファンと呼んだら風を呼べそうに朝にひかって四月みたいだ
とぶための羽ならよかった太陽にお願いしたい言葉があった
セロファンと呼んだらファンが居そうでも目立たず騒がず机の隅に
ぱるぱると川を描いて貼られゆくセロファンテープのひかりをなでる
とうめいなわたしはわたしを隠せずにあさのひかりをあなたに散らす

きみとうたう（うたの日三・四月まとめ）

薄荷。

ゆったりとあなたが囁くおはようが通り抜けるほど瞼は薄い
七日前あなたと飲んだカフェオレの甘さが不意に追いかけてくる
新入りのぬいぐるみにも名をつけて君は世界を少し広げる
バスタオル踊りだしちゃう風の日は鍋いっぱいにカレーを作る
わたしより少し大きなひだり手を独占しているスマホの画面
珍妙なリズムの君の鼻歌で踊れば海に変わるリビング
悪戯な人さし指の圧力で少しへこんだ君のほっぺた
俗っぽいことばで君がうたうから夜を信用してもいいかも

ずっと約束

はとサブレ

一度だけ交わることを願ったがばかりにあとは離れるばかり
癒えるのは忘れることと似てるでしょうこの痛いのは飛ばさずに抱く
豆粒の君の写真を持っていてずっと君だとわかっていたい
春なのに取り残された自販機のあったか～いもかなしいですか
応答がありませんでした、を埋もれさせたくなくてマツキヨを消す
こんなにも縋ってること伝えたら笑うでしょうか　笑わせたいよ
不確かがひかりになることだってある果たされなければずっと約束
いつだって住みたい街は君の住む街です風が強くてごめん

眼科病棟の医師

廣珍堂

手術終へし女医の目元に隈はなく三十代を突つ切つてゆく
次世代の執刀は女医助手も女医見習いも女子の手術室あり
ブラックにいまだ慣れない研修医教授のメスが見えぬ後ろに
日曜はピンヒールブーツに丸いイヤリングで病棟に来る女医
日曜にラガーシャツ着てリュック背負ひ「痛いですか」と問ふ執刀医
目に五針縫はれてぢつと寝るベッド女医の靴音すでに覚へて
たをやかな弥生の風に白妙の衣揺らして女医に急患
若き医師が教へを今日も受くるとき瞳またたく深さ増したり

はるのひかり

福山桃歌

首筋に甘い誘惑　なんでもないふりがじょうずな朝の恋人
はちみつを垂らした熱く香ばしいトーストきみの血肉になって
ふりむけばまばゆい光、光だねって笑った瞳の光の
思ってたより寒い春だからってわざと冷たい指を寄せ合う
ひび割れた揃いのカップの片方を捨てられなくてちぐはぐな棚
ふれるたびとろけてこぼれおちていくきみの決意を受けとめる夜
愛はまだゆるくほどける淡色のリボン何度も結び直して
また朝が来て何も変わらなくたってしずかに老いるきみもわたしも

ウグイスといちご

まさけ

子を寝かす努力を脅かし進む戦車みたいな選挙カーたち
ウグイスのような美声かいや違うあれは主婦らを狙う号砲
頑張るとしか言わない候補者より施策を話す二羽のウグイス
ウグイスが去って声音を見せつけるように囀る庭の鶯
むぐむぐと眠れる吾子の図太さは誰に似たのか　多分旦那だ
柔らかい吾子のほっぺにキスをしてようやく出会ういちご大福
リミットは何分かなと酸っぱめのいちごをひとつゆっくり食べて
完熟のいちごみたいに泣く声は私が母に戻るアラーム

Among…

御糸さち

この中に裏切り者(traitor)が一人います。それが仲間(mate)を鉄砲で撃ってさ
アリバイが誰にもなくて真実はひとりにひとつ　ときにはふたつ
メルトダウンまで13秒12秒11秒あれ誰か死んでる
コーヒーの香りのしないカフェテリアまたも緊急会議のブザー
電気室の奥のぐるぐる　通気口に光が差せば闇がはじまる
ドアというドアが閉まって出られない死なないことが信じられない
三人が取り残された船舶に酸素の止まる音が聞こえて
かんせ^^んに　しんじ^^てたよね　ほ^^くのこと　ようやく　ふたり　きりに　なれたね

軽くなる手

三浦なつ

みどりごのにぎるこぶしの緩くなり静かに眠る午後のリビング
太陽はすべてを照らす暗きもの潜ませながら子を抱く我も
自らを更新してゆくおさなごの深き眠りの寝顔をなでる
きっとまだ差別も区別もしらなくてカメムシ愛でるおさなごの手は
長男の背中をさするその横でちいさくひとつ咳する次男
冬の日の蜜柑の香りの満ち満ちて夕陽の色の小さき手のひら
わたしには見せない顔を咲かせつつ友と一緒に帰る子をみる
だんだんと軽くなる手はあたためた思い出だけを残して老いる